

# Contents

演劇芸術監督 小川絵梨子 .....	2
<hr/>	
2024/2025シーズン 演劇 ラインアップ .....	4
ピローマン .....	5
テーバイ .....	8
白衛軍 The White Guard .....	11
こつこつプロジェクト Studio公演	
夜の道づれ .....	15
シリーズ「光景—ここから先へと—」 Vol.1	
母 .....	18
シリーズ「光景—ここから先へと—」 Vol.2	
ザ・ヒューマンズ—人間たち .....	21
シリーズ「光景—ここから先へと—」 Vol.3	
消えていくなら朝 .....	24
<hr/>	
こつこつプロジェクト — ディベロップメント —	28
ギャラリープロジェクト .....	30
<hr/>	
公演一覧(1997.10~2024.7) .....	31

## 2024/2025 シーズン 演劇

### 演劇芸術監督 小川絵梨子



この度の能登半島地震によりお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りすると共に、ご遺族の方々に深くお悔やみを申し上げます。また被災された皆さまに心よりお見舞いを申し上げます。余震が続き大きな不安の中で過ごされている皆さまの安全と、被災地に1日でも早く平穏が戻りますことをお祈り申し上げます。

21世紀の今も戦火や大難が絶えず続き、世界中で恐怖や不安が色濃く感じられています。本シーズンでは、戦争や大きな変革の渦中で人生を生き、傷つき、失い、悩み、暗闇の中で生きることへの肯定と未来への希望を見出そうとする人間たちの姿を大切に描く物語が多く集まりました。

シーズンの幕開けは、10月にマーティン・マクドナー作『ピローマン』をお届けいたします。本作は、ある架空の国を舞台としながら、理不尽で残酷な世界の中に於ける「物語」が持つ役割や意義、そして紡ぐべき希望について問いかけます。

11月は新作『テーバイ』を上演します。オイディプス王やアンティゴネのストーリーを下敷きとする本新作は、道徳と平和を理想に掲げる反面、己の欲望と恐怖、防衛心に苛まれる人間の宿命を描き出します。本作は第二期のこつこつプロジェクトから始まっており、上演台本・演出は船岩祐太さん、また、多くのキャストがこつこつプロジェクトからの参加となります。

12月には、ミハエル・ブルガーコフの『白衛軍 The White Guard』を上演いたします。ソヴィエト政権誕生直後のウクライナの首都キーウを舞台とし、まさに「今」へと現在進行形で繋がる物語です。

25年の4月には、三好十郎作『夜の道づれ』を当劇場の新しい試みとして「Studio公演」という形式で上演します。本公演はこつこつプロジェクトの一環でもあり、これまでクロードで行っていた試演を、小規模ながらも、観客の方々の前で上演いたします。こちらも『テーバイ』と同じく第二期からの作品であり、演出は柳沼昭徳さんです。敗戦後の日本を舞台とし、混乱と不安の時代の中で人間存在の本質に向き合い、混沌の中でも人間が「歩み」続ける様を描きます。

続く5月からは、シリーズ「光景-ここから先へと-」をお届けいたします。社会での最小単位である家族が織りなす様々な風景から、今日の社会の姿を照らし出すシリーズとなります。第一弾は、チェコ共和国・ブルノ国立劇場の多大なる協力を得て、カレル・チャペックの『母』の招聘公演です。戦時下において出兵する息子たちとその母を描き、戦争という大きな暴力の中で個人の悲劇と人間性への葛藤が語られます。

第二弾は、スティーヴン・キャラム作『ザ・ヒューマンズ-人間たち』の日本初演となります。トニー賞受賞後に映画化もされた本作は、家族という近い人間関係でも共有し得ない、現代社会において一人一人の人間が背負う存在不安や恐怖を描きます。

シリーズ第三弾は、2018年に蓬莱竜太さんが新国立劇場に書き下ろした『消えていくなら朝』をフ

ルオーディションを経て蓬莱さん自らの演出で上演いたします。宗教二世の問題にも斬り込んだ本作は、今日の日本に於いて、更に鮮明で切実な物語として再生されると思います。

戦争や諍いにおいては強いイデオロギーが掲げられ、破壊行動への正当化も見られます。しかし、その深刻な結果を背負わされるのは一人一人の人間となります。一般化や功利主義から離れ、一つ一つの命、一つ一つの個の生に目を向けることには時に膨大な精神力を必要とし、もちろん限界も存在します。しかし遠く離れた地の、または目の前の、自らにとっての未知の他者を想像し、未知の視界を発見し向き合うための力、ひいて他者との共存への力が演劇には内在していると考えています。

本シーズンをお楽しみいただけましたら幸いです。

#### 〈プロフィール〉

2004年、ニューヨーク・アクターズスタジオ大学院演出部卒業。06～07年、平成17年度文化庁新進芸術家海外研修制度研修生。18年9月より新国立劇場の演劇芸術監督に就任。

近年の演出作品に、『ART』『おやすみ、お母さん』『管理人／THE CARETAKER』『ダディ』『ダウト～疑いについての寓話』『検察側の証人』『ほんとうのハウンド警部』『作者を探す六人の登場人物』『じゃり』『ART』『死と乙女』『WILD』『熱帯樹』『出口なし』『マクガワン・トリロジー』『FUN HOME』『The Beauty Queen of Leenane』『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』『CRIMES OF THE HEART 一心の罪』『死の舞踏／令嬢ジュリー』『ユビュ王』『夜想曲集』『RED』『スポケーンの左手』など。新国立劇場では『レオポルトシュタット』『アンチポデス』『キネマの天地』『タージマハルの衛兵』『骨と十字架』『スカイライト』『1984』『マリアの首-幻に長崎を想う曲-』『星ノ数ホド』『OPUS/作品』の演出のほか、『東京ローズ』『かもめ』『ウィンズロウ・ボーイ』の翻訳も手がける。

# Drama

## 2024/2025 シーズン 演劇 ラインアップ 〈計 7 演目〉

2024 年 10 月

### ピローマン

作: マーティン・マクドナー  
翻訳・演出: 小川絵梨子

2024 年 11 月

### テーバイ

新作

原作: ソポクレス『オイディプス王』『コロノスのオイディプス』『アンティゴネ』  
翻訳: 高津春繁(『オイディプス王』『コロノスのオイディプス』)、呉 茂一(『アンティゴネ』)による  
構成・上演台本・演出: 船岩祐太

2024 年 12 月

### 白衛軍 The White Guard

日本初演

作: ミハイル・ブルガーコフ  
英語台本: アンドリュー・アプトン  
翻訳: 小田島創志  
演出: 上村聡史

2025 年 4 月

こつこつプロジェクト Studio 公演

### 夜の道づれ

作: 三好十郎  
演出: 柳沼昭徳

2025 年 5~6 月

シリーズ「光景—ここから先へと—」Vol.1

### 母

海外招聘公演

作: カレル・チャペック  
演出・上演台本: シュチュエパーン・パーツル  
字幕翻訳: 広田敦郎

2025 年 6 月

シリーズ「光景—ここから先へと—」Vol.2

### ザ・ヒューマンズ—人間たち

日本初演

作: スティーヴン・キヤラム  
翻訳: 広田敦郎  
演出: 桑原裕子

2025 年 7 月

シリーズ「光景—ここから先へと—」Vol.3

### 消えていくなら朝

フルオーデション 7

作・演出: 蓬莱竜太

2024年10/8～27

# ピローマン

The Pillowman  
小劇場

●会員先行販売期間：2024年7/28(日)～8/6(火)  
●一般発売日：2024年8/10(土)  
料金 A:7,700円 B:3,300円

作：マーティン・マクドナー

Written by Martin McDONAGH

翻訳・演出：小川絵梨子

Translated and Directed by OGAWA Eriko

出演：成河、亀田佳明、斉藤直樹、松田慎也、大滝 寛、那須佐代子

Cast : Songha , KAMEDA Yoshiaki, SAITO Naoki, MATSUDA Shinya, OTAKI Hiroshi, NASU Sayoko

## 作品

今や映画監督としても活躍する、イギリスの劇作家マーティン・マクドナーの代表作の一つ。アイルランドを舞台とした作品を多く発表してきたマクドナー作品の中で、初めてアイルランド以外の架空の国を舞台にしています。2004年のローレンス・オリヴィエ賞、04-05年のニューヨーク演劇批評家協会賞を受賞しました。

## 物語

作家のカトゥリアンはある日、「ある事件」の容疑者として警察に連行されるが、彼にはまったく身に覚えがない。二人の刑事トゥポルスキーとアリエルは、その事件の内容とカトゥリアンが書いた作品の内容が酷似していることから、カトゥリアンの犯行を疑っていた。刑事たちはカトゥリアンの愛する兄ミハエルも密かに隣の取調室に連行しており、兄を人質にして自白を迫る。カトゥリアンが無罪を主張する中、ミハエルが犯行を自白してしまう。自白の強要だと疑うカトゥリアンは兄に真相を問いたが、それはやがて兄弟の凄惨な過去を明らかにしていき、悲劇の連鎖が生み出されていく……。

**翻訳・演出家からのメッセージ****小川絵梨子**

本作品は、マーティン・マクドナーの傑作の一つであり、今なお世界中で愛され続けている作品でもあります。本作は、架空の国を舞台としており、警察に尋問を受ける作家とその兄を中心に物語が展開していきます。作家が書くのは、毒々しい御伽噺のような、ファンタジーの皮をかぶった悪夢のような物語であり、それが舞台上でも展開されていきます。やがて作家とその兄の凄惨な過去が暴かれていくにつれ、作家の描く禍々しい童話の世界は、現実世界へと侵食していき、そして痛ましく恐ろしい事件に繋がっていきます。本作は、ダークコメディの一面を持ちつつ、理不尽な世界の中で、物語という存在が如何なる存在意義を持ち得るかを問いかけます。物語の作り手のプライドとある種の傲慢を正直に暴きつつ、人類が発明した「物語」が持つ底力と、絶望の中でも繋いでいくべき希望の糸を描き出す物語となっています。

## スタッフ プロフィール

## マーティン・マクドナー

Martin McDONAGH

イギリス・ロンドン出身の劇作家、映画監督。

1970年ロンドンで生まれ、育つ。幼少期、アイルランド出身の両親の影響でアイルランドの土地・文化・言語に触れる。学校を中退し定職に就かずに創作を続け、戯曲の草稿が劇場関係者の目に留まり劇作家として活動が始まる。デビュー作『The Beauty Queen of Leenane』（96年）で、ローレンス・オリヴィエ賞・作品賞にノミネート、一躍注目を浴びる。アイルランド西部の村を舞台としたこの作品は、その後上演された『コネマラの骸骨』『ロンサム・ウェスト』（97年）と併せて「リーナン三部作」と呼ばれる。一方、『イニシュマン島のビリー』（96年）や『ウィー・トーマス』（01年）も同地域の島を舞台とし「アラン諸島三部作」の作品として知られる。

その後、『ピローマン』（03年）でローレンス・オリヴィエ賞・最優秀新作演劇賞を受賞。『スポケーンの左手』（10年）、『ハングメン』（15年）、『A Very Very Very Dark Matter』（18年）と新作が上演されている。

また、映画監督・脚本でも高い評価を受けている。初監督の短編映画「シックス・シューター」（04年）で、アカデミー賞短編実写映画賞を受賞。初長編監督作「ヒットマンズ・レクイエム」（08年）、「セブン・サイコパス」（12年）、「スリー・ビルボード」（17年）ではアカデミー賞・作品賞と脚本賞にノミネート、ゴールデングローブ賞を受賞。「イニシェリン島の精霊」（22年）ではアカデミー賞9部門にノミネート、ゴールデングローブ賞を受賞。

## 小川絵梨子

OGAWA Eriko

※3 ページを参照



2024年11/7～24

<新作>

A New Play

# テーバイ

Thebes

小劇場

●会員先行販売期間：2024年8/31(土)～9/9(月)

●一般発売日：2024年9/14(土)

料金 A:7,700円 B:3,300円

原作：ソポクレス『オイディプス王』『コロノスのオイディプス』『アンティゴネ』

Original by Sophocles “Oedipus Rex”, “Oedipus at Colonus”, “Antigone”

翻訳：高津春繁(『オイディプス王』『コロノスのオイディプス』)、呉 茂一(『アンティゴネ』)による

Translation based on KOZU Harushige (“Oedipus Rex” “Oedipus at Colonus”), KURE Shigeichi (“Antigone”)

構成・上演台本・演出：船岩祐太

Scripted and Directed by FUNAIWA Yuta

出演：植本純米、加藤理恵、久保耐吉、池田有希子、木戸邑弥、高川裕也、藤波瞬平、國松 卓、小山あずさ、今井朋彦

Cast：UEMOTO Junmai, KATO Rie, KUBO Chukichi, IKEDA Yukiko, KIDO Yuya, TAKAGAWA Yuya,

FUJINAMI Shumpei, KUNIMATSU Taku, KOYAMA Azusa, IMAI Tomohiko

## 作品

一年間をかけて試演を重ね、その都度、演出家と芸術監督、制作スタッフが協議し、作品がどの方向に育っていくのか、またその方向性が妥当なのか、そしてその先の展望にどのような可能性が待っているのかを見極めていく「こつこつプロジェクト」。

2021年6月から2022年2月まで行われた第二期の作品のうち、船岩祐太が構成、上演台本、演出を進めた『テーバイ』を上演いたします。本作はソポクレスによる、知らずのうちに近親相姦と父親の殺害に手を染めたテーバイの王オイディプスの物語『オイディプス王』、テーバイを追放され放浪の途にあるオイディプスの神々との和解とその生の終幕を描いた『コロノスのオイディプス』、そしてオイディプスの娘であるアンティゴネが行った兄弟の埋葬をめぐる『アンティゴネ』、これらの同じ時系列の神話をモチーフとしながらも独立した三作品を一つの戯曲として再構成し、現代における等身大の対話劇としての上演を目指します。

単なるギリシア悲劇三作品のダイジェストではなく、三作品を再構成し、神々の存在が個人と共同体に大きく影響を与えた世界観と、そこから脱却し近代化していくプロセスを背景に据え、オイディプス、クレオン、テセウスを通して描き出される「統治者の資質」「統治者の在り方の難しさ」を物語の軸とし、終幕(『アンティゴネ』)における埋葬行為をめぐる描かれる「人間の法」と「神々の法」の対立を現代人の心理的な欲求の相克として描くことにより、今日への問いかけとなる作品を目指します。

## 物語

テーバイの王オイディプスは国を災いから救うべく、後のイオカステの弟クレオンに頼り「先王ライオスを殺害した犯人を追放すること」という神託を得る。しかし、そこで明かされていく真実は、オイディプス自身がライオス王を殺した張本人であること、そして実の母親とは知らずにイオカステを后とし、子をもうけているという恐ろしい運命であった。絶望の中でオイディプスは自らの目を突いて盲目となり、放浪の旅に出る……。



**演出家からのメッセージ**

**船岩祐太**

劇場が「上演する場所」だけでなく「創る場所」として何ができるのかを模索する「こつこつプロジェクト」。絶賛模索・展開中のこの企画の目的・意義は多様な受け止め方があるかと思います。「こつこつ」とは【地道に働くさま。たゆまず務め励むさま。】を表す言葉のようですし、長い時間をかけて何かを積み上げていく事が命名の根本にあるようですが、私はこの音の響きから雛鳥が卵の殻を少しずつ割っていく様を想起します。多様な作品の卵が上演を前提としてしまうと孵化することを躊躇っているように思いますが「まずは卵から出たおいで、その後の事は飛べるようになってから考えよう」と優しく微笑みかけてくれる懐の広い企画であるように思います。

この地味ではありながらも壮大な試みの中で「一つ、こいつを飛ばしてみるか」という事で『テーバイ』が2024/2025シーズンのラインアップの末席に加えていただいたこと、非常に光栄に思っております。

「作り手が通常の一か月の稽古ではできないことを試し、作り、壊して、また作る場にしたい」という小川芸術監督の言葉を、額面通りに受け取り選んだ演目はソボクレスのそれぞれ独立した戯曲『オイディプス王』『コロノスのオイディプス』『アンティゴネ』を一本にしてしまおうという試みです。原典を手元に企画の趣旨に賛同してくれた多くの俳優たちの視点を擦り合わせながら、ああでもないこうでもないと作っては壊し、そして作ったものが今回の上演作品である『テーバイ』になります。

古典作品を題材にする喜びは現代と古典の接点の発見にあると思っておりますが、この作品を「こつこつ」している最中にも現代の方が目まぐるしく変容していきました。しかし、時代の変貌を物ともせずに変わらぬ人間の形相を照らしだすギリシア悲劇の大きさを度々目の当たりにしました。稽古場はさながら遺跡発掘現場のようで「こつこつ」と鑿をたたくハンマーの音と発見の歓声が鳴り響いていました。

試演から少し時間がたってしまいましたし、現代の方もまた大きく動いています。新しい視点を得て、観客の皆様とギリシア悲劇から透けて見える現代や変わらぬ人間の形相を共有できるのを楽しみにしています。

スタッフ プロフィール

ソポクレス

Sophocles

496頃B.C.–406頃B.C.

アイスキュロス、エウリピデスと並ぶ、古代ギリシアの三大悲劇詩人の一人。

生涯で120編以上の戯曲を創作したと言われるが、完全な形で残っているのは『アイアス』『アンティゴネ』『トラキスの女たち』『オイディプス王』『エレクトラ』『ピロクテテス』『コロノスのオイディプス』の7作品のみ。

船岩祐太

FUNAIWA Yuta

桐朋学園芸術短期大学芸術科演劇専攻卒業。地人会の木村光一氏、演劇企画集団THE・ガジラの鐘下辰男氏に師事。また小劇場から商業演劇まで様々な作品に演出助手、演出部として参加。2007年に演劇集団 砂地を結成。演劇集団 砂地では古典戯曲を原典とした作品を中心に発表。主な作品に演劇集団 砂地『Disk』（世田谷ネクストジェネレーション）『アトレウス』、『楡の木陰の欲望』『胎内』など。



2024年12/3～22

<日本初演>

Japan Premiere

# 白衛軍 The White Guard

The White Guard

中劇場

●会員先行販売期間：2024年9/22(日・祝)～10/1(火)

●一般発売日：2024年10/12(土)

料金 S:8,800円 A:6,600円 B:3,300円

作：ミハイル・ブルガーコフ

英語台本：アンドリュー・アプトン Written by Mikhail BULGAKOV in a version by Andrew UPTON

翻訳：小田島創志 Translated by ODASHIMA Soshi

演出：上村聡史 Directed by KAMIMURA Satoshi

出演：村井良大、前田亜季、上山竜治、池岡亮介、石橋徹郎、内田健介、前田一世、小林大介、大場泰正、大鷹明良

今國雅彦、山森大輔、西原やすあき、采澤靖起、駒井健介、武田知久、草薨智文、笹原翔太、松尾 諒

Cast：MURAI Ryota, MAEDA Aki, KAMIYAMA Ryuji, IKEOKA Ryosuke, ISHIBASHI Tetsuro, UCHIDA Kensuke,

MAEDA Issei, KOBAYASHI Daisuke, OBA Yasumasa, OTAKA Akira

IMAKUNI Masahiko, YAMAMORI Daisuke, SAIBARA Yasuaki, UNEZAWA Yasuyuki, KOMAI Kensuke,

TAKEDA Tomohisa, KUSANAGI Tomofumi, SASAHARA Shota, MATSUO Ryo

## 作品

二十世紀ロシアを代表する作家、ブルガーコフ。その人生の道のりは平穏ではありませんでした。作家としての評価も毀誉褒貶が激しく、まさに時代に翻弄された一生と言えるでしょう。体を蝕む病魔との闘いも相俟って、48年9か月の時間に燃焼し尽された彼の生涯は、ソヴィエトという国家に生きた芸術家として、永遠に記憶されるべきものです。

その彼の代表作といえる戯曲を上演することは、まさに時宜を得た公演となります。『白衛軍』は1925年に小説として発表され、翌年、作家自身が戯曲『トゥルビン家の日々』としてモスクワ芸術座で上演。「第二の『かもめ』」と評され成功を収めます。今回は、それを元に2010年に英国のナショナル・シアターで上演されたアプトン版に基づいて上演いたします。

## 物語

1918年12月、ウクライナの首都キーウ。前年、ロシア帝政が崩壊。ソヴィエト政権が誕生するが、キーウではウクライナ人民共和国の樹立を宣言。ドイツと同盟を組みソヴィエト赤軍を追放し、その立役者であったロシア帝国軍（白衛軍）の司令官を総領とする新政府軍が誕生する。しかし内乱が続き、白衛軍と、その転覆を目論む革命軍が対立し、キーウの街には緊張が走っていた。

白衛軍のトゥルビン家では、長兄アレクセイ、妹エレーナ、弟ニコライ、エレーナの夫タリベルクが暮らしていた。明日にでも出撃命令が下るかという緊迫した状況の下、タリベルクが急遽ベルリンへ発つという。どうやら、ドイツが新政府との同盟を解消しウクライナから退去するらしい。これを新政府瓦解の予兆と捉えたアレクセイとニコライは、白衛軍が劣勢となり自分たちの身に危険が及ぶのを感じるのであった。やがて、彼らの運命は歴史の大きなうねりのなかで翻弄されてゆく……。

**翻訳家からのメッセージ**

**小田島創志**

世界各地で続く戦争は、そこで暮らす人の命を奪い、生活を破壊し、人生を狂わせる。苦しみに引き裂かれた現在において、未来を見ることは可能なか—ミハイル・ブルガーコフの『白衛軍 The White Guard』は、その問いを我々に突きつける。

初めて『白衛軍』を読んだとき、チューホフの『桜の園』を1918年～19年の戦時下におけるキーウに置き換えた物語だと思った。帝政ロシアの軍人とその家族。ドイツ軍と、その傀儡となっているゲトマン。ウクライナ民族主義者シモン・ペトリューラに従う軍人たち。そして革命を進めるボリシェヴィキ。様々な勢力が入り乱れ、登場人物たちは情報や状況に翻弄されていく。翻弄されながら、一人一人がそこに生きている。信念を曲げない人物、現状に怒りを抱く人物、保身に走る人物、愛する人に寄り添う人物。そうした人物たちが、時に悲しみ、時に笑い、時に弱さを見せ、時に未来を志向しながら、生活を必死に続けていく。アンドリュー・アプトン版の台本では、原作で描かれている人間模様の普遍的な側面を、巧みに英語化している。

翻訳に当たっては、アプトン版の台詞の強度やリズムの良さを、どう日本語に移植するか葛藤している。そして、約100年前のキーウに生きる人々の何をブルガーコフが描こうとしたのか、彼がウクライナやロシアをどう捉えていたのか、解釈する努力も放棄できない。多くの戦争は「平和」や「解放」という大義名分が掲げられる。その虚飾に、その暴力性に怒りを覚えながら、今まさに戦火で苦しむ人々を思いながら、『白衛軍』に向かう日々がこれからも続くだろう。

**演出家からのメッセージ**

**上村聡史**

今から一世紀程前、社会の視座を大きく変えたロシア革命。時代の変化に希望を託した人々と、闘い敗れた人々。ロシア帝国期のウクライナ・キーウ出身のミハイル・ブルガーコフは、自らの体験をもとに、夢破れた反革命側の『白衛軍』を小説として描きました。そして『白衛軍』は戯曲となり、度重なる検閲による改稿、タイトルも『トゥルビン家の日々』として上演され、幾度となくナイフで裂かれた衣服のように、ソ連時代を潜り抜けました。

体制への鋭い批評性が持ち味のブルガーコフですが、本作は文筆活動初期の作品ということもあり、祖国の風景や思考を懸命に守ろうとした軍人たちとその家族の姿が瑞々しく描かれます。そして、“変革”という大義の揺れ動きのなかであっても、見つめ続けた人間賛歌と、それを押しつぶす全体構造への批評眼。

日本での上演歴がない本作を取り上げることは、いま世界で起きている、時計の針を逆戻りするような事態への畏れが大前提にあります。現代の価値観を見つめるのと同時に、先人たちが日々の生活から培った想像力に、いま一度、敬意を示す必要がある気がします。それは、社会を良くするためというエクスキューズによって生まれた理性の文言ではなく、日々の暮らしや他者との生活で培われた感性から生じた想像力。

果たして、現代に生きる私たちは、先人たちの未来に託した思いを受けとめて、世界を歩めているのか。私たちの生活は、いまや未来に限らず、過去が培った想像力を破壊しているのではないか。近代戯曲といわれる古い作品ではありますが、現代に怒りを覚えながら、“変革”という裂け目に、己の信念にさえ疑念を投げかけながらも、まだ見ぬ未来に光を見出すために生きもがいた人々の声を、劇空間に届けたいと思います。

スタッフ プロフィール

ミハイル・ブルガーコフ

Mikhail BULGAKOV

---

1891年～1940年。ウクライナの首都、キーウ出身の小説家、劇作家。

幼少期から内外の文学に親しみ、その体験は彼の後半生に多大な影響を及ぼした。キーウ大学で医学を修め、医師として開業。1918年、ロシア革命に伴う内戦では軍医として参加。戦後、文学で身をたてる決意をし、モスクワへ移住。ロシアの文学雑誌に載せた短編小説が高く評価され、作家として注目される。

しかし、彼の作品には、根底に革命政府への批判がこめられていたため、たびたび出版、上演禁止に晒される。それらの弾圧のなかでも精力的な創作活動を行ったが、病魔のため、48歳の若さで世を去った。

それらの作品群はスターリンの死後、54年のソヴィエト作家同盟第二回大会で正式に名誉回復され、現在では彼の作品の出版、上演は世界的に行われている。代表作の『巨匠とマルガリータ』は、「二十世紀最高の文学作品」とも評価されている。

アンドリュー・アプトン

Andrew UPTON

---

オーストラリア出身の劇作家、脚本家、演出家。

これまでに、『ヘッダ・ガーブレル』（イブセン）、『桜の園』『ワーニャおじさん』『プラトーフ』（チェーホフ）、『シラノ・ド・ベルジュラック』（ロスタン）、『女中たち』（ジュネ）などを翻訳し、英国のナショナル・シアター（NT）やシドニー・シアター・カンパニーで上演されている。

また2008年から12年まで、妻で女優のケイト・ブランシェットとともにシドニー・シアター・カンパニーの芸術監督を務めた。

## 小田島創志

ODASHIMA Soshi

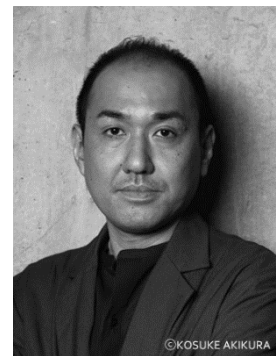
1991年生まれ。武蔵大学、共立女子大学ほか非常勤講師。演劇雑誌『悲劇喜劇』編集協力。専門はハロルド・ピンター、トム・ストッパードを中心とした現代イギリス演劇。これまでの翻訳作品に『プレイキング・ザ・コード』『ラビット・ホール』『聖なる炎』『CLOSER』『管理人／THE CARETAKER』『HEISENBERG (ハイゼンベルク)』『ボルノグラフィ』『受取人不明 ADDRESS UNKNOWN』など。また、ミュージカルの翻訳・訳詞作品に『スライス・オブ・サタデーナイト』『回転木馬』。新国立劇場では、『エンジェルス・イン・アメリカ』『アンチポデス』『タージマハルの衛兵』を翻訳。



## 上村聡史

KAMIMURA Satoshi

2001年文学座附属演劇研究所入所、18年に同劇団を退座し、現在はフリーで活動。09年より文化庁新進芸術家海外留学制度において1年間イギリス・ドイツに留学。15年に第22回読売演劇大賞最優秀演出家賞、第17回千田是也賞、21年には第29回読売演劇大賞最優秀演出家賞、第56回紀伊國屋演劇賞を受賞。近年の主な演出作品に、『My Boy Jack』『野鴨-Vildanden-』『ガラスの動物園』『Oslo (オスロ)』『ミセス・クライン』『約束の血』『炎 アンサンディ』『岸 リトラル』『森 フォレ』など。新国立劇場では、『エンジェルス・イン・アメリカ』『斬られの仙太』『オレスティア』『城塞』『アルトナの幽閉者』を演出。



# 夜の道づれ

Yoru no Michizure

小劇場

●会員先行販売期間：2025年2/1(土)～2/10(月)

●一般発売日：2025年2/15(土)

作：三好十郎

Written by MIYOSHI Juro

演出：柳沼昭徳

Directed by YAGINUMA Akinori

出演：石橋徹郎、金子岳憲、林田航平、峰 一作、滝沢花野

Cast : ISHIBASHI Tetsuro, KANEKO Takenori, HAYASHIDA Kohei, MINE Issaku, TAKIZAWA Hanano

## 作品

一年間をかけて試演を重ね、時間に追われない稽古のなかで、作り手の全員が問題意識を共有し、作品への理解を深め、舞台芸術の奥深い豊かさを一人でも多くの観客の方々に伝えられる公演となることを目標とする「こつこつプロジェクト」。2021年から第二期が始動し、22年2月に最終試演会が行われました。最終試演会后、さらに作品を深めてはどうかという協議がなされ、引き続き第三期メンバーの一人として、今年プロジェクトが再始動、「Studio公演」として皆様に公開いたします。

『夜の道づれ』は1950年に文芸誌「群像」に初出、敗戦後の夜更けの甲州街道をとぼとぼと歩いている、男二人の一種のロードムービーのような戯曲です。

この演劇的実験性の高い作品に挑戦するのは、京都を拠点に活躍する劇団烏丸ストロークロック主宰・柳沼昭徳。自身の創作のなかでも、「歩く」ことで人や事物と出会い、対話し、気づくことで過去を清算・懺悔するといった作品を作っていることもあり、本作に惹かれたとのこと。稽古初期の段階では、実際に甲州街道を歩くフィールドワークを行い、戯曲をフィジカル面でも検証、稽古に臨みました。試演会を重ねるにつれ、「発語」と「歩く」という行為が統合された俳優と、観客がまるで一緒に歩いている感覚に陥る不思議な作品へ変化をとげました。その時間と空間を深掘り、さらなる進化を目指します。

## 物語

敗戦後の夜更けの甲州街道。作家の御橋次郎は、家へ帰る途中、見知らぬ男、熊丸信吉と出会う。歩く道すがら、2人の目の前には、若い女や警官、復員服の男、農夫などが次々と現れる。会話しながら進むうち、なぜ熊丸がこんな夜中にここを歩いているか語られだすのだが……。

### 演出家からのメッセージ

#### 柳沼昭徳

---

敗戦を境に迎えた180度異なる新たな戦後日本の夜明け。人々が戦争の痛みを抱えながら、明日どうなるともわからないながら、復興する街を生きている。三好十郎は、このころの東京の街を歩きました。そこで見聞きしたことをありのままに取り上げたドキュメンタリーとして描いたのが本作です。ここでも多くの三好作品同様「いかに生きるか」という普遍的な問いと、孤独な人間同士が連帯することの絶望と希望が、三好節というべき言葉の質量で描かれています。

しかしこの『夜の道づれ』が他の作品群のなかで異彩を放っているのは、台詞で語られる言語だけでなく、人が劇中ほとんどの時間を歩き続けている点にあります。歩くことで生じる体の変化と、連動して生じる心の変化を劇要素にすることで、身体を起点にあるカタルシスを得ようとする挑戦がなされています。

歩く目的を「出離」と三好が表現するように、社会混乱のなか、迷いや不安を断つために世俗から離れ、真理に向かうこの物語ですが、いつの世であっても、七転八倒しながらも足を踏み出し続ける人間。その生き生きとした凄みを体感していただけると幸いです。



## スタッフ プロフィール

## 三好十郎

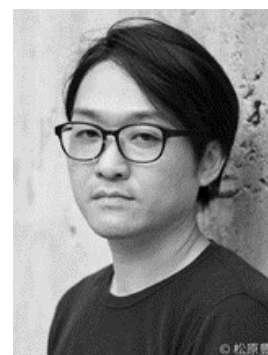
MIYOSHI Juro

1902年～58年。吉江喬松に師事し、早稲田大学在学中に詩人としてデビュー。28年、高見順らと左翼芸術同盟を結成。同年、処女戯曲『首を切るのは誰だ』を発表。全日本無産者芸術連盟(ナップ)に参加、『疵だらけのお秋』のほか小説・詩を書き、31年、処女戯曲集『炭塵』を出版。以降、プロレタリア劇作家として知られたが、社会的リアリズムと呼ぶ創作方法により、政治主義・公式主義に不満を抱き組織から離れる。生涯で57編の戯曲とラジオドラマの脚本を残し、『炎の人』で52年読売文学賞戯曲賞を受賞。そのほかの代表作に『浮標』『斬られの仙太』『おりき』『廃虚』『獅子』『その人を知らず』『胎内』『崖』『冒した者』など。58年12月16日、東京・赤堤の自宅書斎で逝去。享年56歳。戯曲体で81枚、小説体で130枚書かれた『神という殺人者』が絶筆未完の遺作となったほか、『悪人を求む』が遺稿として同年12月19日の読売演劇で発表される。

## 柳沼昭徳

YAGINUMA Akinori

近畿大学在学中の1999年に「烏丸ストロークロック」を旗揚げ、京都を拠点に国内各地で演劇活動を行う。作品のモチーフとなる地域での取材やフィールドワークを元に短編作品を重ね、数年かけて長編作品へと昇華させていく創作スタイルが評価されている。2015年京都芸術センター主催演劇計画Ⅱ『新・内山』にて第60回岸田國士戯曲賞にノミネートされる。18年、20年と東京芸術劇場 芸劇eyesにて『まほろばの景』シリーズを上演、話題を呼ぶ。平成28年度京都市芸術新人賞受賞。



# 母

Mother

小劇場 〈チェコ語上演／日本語字幕付〉

●会員先行販売期間：2025年3/1(土)～3/10(月)

●一般発売日：2025年3/15(土)

作：カレル・チャペック

Written by Karel ČAPEK

演出・上演台本：シュチェパン・パーツル

Stage direction and Adaptation : Štěpán PÁČL

字幕翻訳：広田敦郎

Translation : HIROTA Atsuro

出演：ブルノ国立劇場ドラマ・カンパニー

Cast : The National Theatre Brno Drama Company

## 作品

チェコ共和国・ブルノ国立劇場の協力のもと、2022年4月にブルノ国立劇場にてシュチェパン・パーツルの演出によって初演、現在も定期的に上演されている、カレル・チャペックの名作『母』を招聘し日本初演します。

チェコを代表する小説家、劇作家であるカレル・チャペック（1890-1938）は、反戦劇によって、スペイン内戦だけでなく、ヨーロッパ全土で高まるファシズムの傾向にも抵抗しました。この驚異的な作品のパワーは、世の中に大きな変化をもたらそうとする女性／母親から男性たちへの、今もなお心に響く抵抗にあります。

### 〈ブルノ国立劇場ドラマ・カンパニー〉

ブルノ国立劇場ドラマ・カンパニーは、伝統的かつ近代ヨーロッパ志向のアンサンブルで、チェコの文化シーンにおいて重要な位置を占めています。その目覚ましい伝統は、民族復興期の最盛期を迎えた19世紀後半にさかのぼり、チェコ語による最初の劇場として設立されました。

現在、ブルノ国立劇場ドラマ・カンパニーは、マヘン劇場とレドゥータ劇場という2つの歴史的に貴重な建物を所有しており、その舞台では、伝統とスタイルの多様性に重点を置きながら、現代的なテーマに対する芸術的な作品を提供しています。

2019年からは、ドラマツルグであるミラン・ショテックが芸術監督を務め、若手俳優や舞台演出家を迎え入れ、アンサンブルの若返りを図っています。ショテックの芸術的目標のひとつは、チェコと外国の現代劇を上演すること以外に、チェコの古典的な劇作家に焦点を当てることです。彼は、チェコ演劇の世界観を決定づけた古い戯曲への現代的なアプローチを堅持しており、チャペックの戯曲『母』の上演は、このような長期的な経過の一環でもあります。

**物語**

一人の人間の命が、人類という偉大な物語の大海の一滴に過ぎないという考えに我慢することが可能だろうか？そして、もしあなたが非常に勇敢な5人の息子を持つ母親だったらどうだろう？

この物語は、夫と死別した未亡人ドロレス（主人公である母親）の悲劇を描いている。彼女の夫はアフリカでの戦いで死んだ。長男は熱帯の国で医師として、次男はパイロットとして、それぞれの使命を果たして死んだ。そして彼女の双子の息子は内戦に巻き込まれ、戦いの中で2人とも殺される。亡くなった者たちは霊となって家に帰り、母親と関わり続ける。他国が祖国を侵略したとき、末っ子で唯一生き残った息子のトニは、侵略者と戦うために出国を決意する。死んだ兄弟と父親は彼を励ますが、ドロレスは反対する。彼女はトニまでも失うわけにはいかない！ドロレスがついに彼らを説得したとき、放送が流れた。敵が小学校に爆弾を投下して子供たちを殺したのだ。ドロレスは、他人の子供たちが死に続けるなか、自分の息子が戦争に参加するのを止めることはできないと悟る……。

## スタッフ プロフィール

## カレル・チャペック

Karel ČAPEK

1890年～1938年。カレル・チャペックはチェコスロバキアを代表する小説家、劇作家、物語作家、コラムニスト、フランス詩の翻訳家。

チャペックの劇作は、演出家及び劇作家として活躍した1920年代に始まる。彼の戯曲『R.U.R. - Rossum's Universal Robots』（20年）は、「ロボット」という言葉を世に知らしめた近未来SFであり、『マクロプス家の事件』（22年）は、後にモラヴィアの作曲家レオシュ・ヤナーチェクが音楽を手がけた。

1930年代初頭、カレル・チャペックはジャーナリズムと小説の執筆に専念した。劇作家としての活動を始めたのは1930年代後半になってからで、38年12月29日にハビマで初演された『白い病』（37年）と、39年12月3日にハビマで初演された『母』（38年）を、ズヴィ・フリードランド演出のもとハンナ・ロヴィナ主演で発表した。

25年、チャペックは国際ペンクラブの一部としてチェコスロバキアペンクラブを設立し、数年にわたり同クラブを主宰した。カレル・チャペックは、芸術家であり、人文主義者であり、哲学者でもあるという多才な個性を、その著作のすべてにおいて発揮している。第二次世界大戦の間、チャペックは若きチェコスロバキアの機知に富んだ精神の一人であった。38年12月、彼はインフルエンザに罹り、急性腎炎と二重肺炎になった。チャペックは38年12月25日、ナチス・ドイツによるボヘミアとモラヴィア占領の数ヵ月前に肺水腫で死亡した。

## シュチェパーン・パーツル

Štěpán PÁČL

チェコ共和国・ブルノ国立劇場専属演出家。ブラハで生まれ、舞台芸術アカデミー演劇学部を卒業。2007年から13年にかけてフリーランスの舞台演出家として活動し、13年にオストラヴァのペトル・ベズルチ劇場の芸術監督に就任。15年から17年にかけては、ブラハ国立劇場の専属演出家を務めた。

19年9月にブルノ国立劇場に入団して以来、チェーホフの『かもめ』（20年）、オールビーの『ヴァージニア・ウルフなんかこわくない』（21年）、シェイクスピアの『十二夜』（22年）などを演出。『十二夜』はポーランドのグダニスクで開催される国際シェイクスピア・フェスティバルに招待されている。

世界的に有名な古典戯曲に加え、パーツルは、22年にブルノで上演され大成功を収めた彼の傑作『母』（カレル・チャペック作）など、チェコの戯曲にも力を入れている。また、ブラハとブルノの舞台芸術アカデミーで演技と舞台演出を教えている。



## 広田敦郎

HIROTA Atsuro

劇団四季、TPTを経て、フリーランスの戯曲翻訳者。2009年、トム・ストッパード作『コースト・オブ・ユートピア』の翻訳で第2回小田島雄志翻訳戯曲賞。アジア・カルチュラル・カウンシル（ACC）13年グランティ。

近年の翻訳上演作品に、チェーホフ作『三人姉妹』、『桜の園』（サイモン・ステイーヴンス版）、アーサー・ミラー作『橋からの眺め』『みんな我が子』『セールスマンの死』『るつぽ』、テネシー・ウィリアムズ作『地獄のオルフェウス』『西洋能 男が死ぬ日』、ダグラス・マックスウェル作『OUR BAD MAGNET』、ダイアナ・ソン作『STOP KISS』、アレクシ・ケイ・キャンベル作『The Pride』『ブラッケン・ムーア』、カレル・チャペック作『母』、サイモン・ステイーヴンス作『FORTUNE』、『夜中に犬に起こった奇妙な事件』、イブセン作『民衆の敵』、ジョン・スタインベック作『二十日鼠と人間』、ハワード・ブレントン作『ブラディ・ポエトリー』、クリストファー・ハンプトン作『危険な関係』。新国立劇場では『レオポルトシュタット』の翻訳を手掛けた。



シリーズ「光景—ここから先へと—」Vol.2

2025年6月  
＜日本初演＞  
Japan Premiere

# ザ・ヒューマンズ—人間たち

The Humans

小劇場

●会員先行販売期間：2025年3/29(土)～4/7(月)

●一般発売日：2025年4/12(土)

作：スティーヴン・キャラム

Written by Stephen KARAM

翻訳：広田敦郎

Translated by HIROTA Atsuro

演出：桑原裕子

Directed by KUWABARA Yuko

## 作品

劇作家・脚本家として活躍するスティーヴン・キャラムのヒット作、『ザ・ヒューマンズ—人間たち』。マンハッタンの老朽化したアパートを舞台に、感謝祭を祝うために集まったある家族の会話から、貧困、老い、病気、愛の喪失への不安、宗教をめぐる対立などが浮かびあがる一夜の物語です。人間の抱える人生の大きな不安を描くこの物語の世界は、現在のアメリカの縮図であり、それは私たち日本の現在とも重なります。

2014年アメリカン・シアター・カンパニー製作によりシカゴで初演され、15年ラウンドアバウト・シアター・カンパニー製作によりニューヨーク、オフ・ブロードウェイで上演、16年にはキャラムのブロードウェイ・デビュー作となり、再びピュリッツァー賞演劇部門最終候補、トニー賞、ニューヨーク演劇批評家協会賞の最優秀プレイ、オビー賞劇作賞を受賞しました。続いて21年、映画製作・配給会社「A24」製作により映画化、キャラム自身が監督も務め、エイミー・シューマン、ビーニー・フェルドスタイン、スティーヴン・ユアンらが出演、高く評価されています。演出には、22年に新国立劇場『ロビー・ヒーロー』の記憶も新しい桑原裕子を再び迎え、日本初演でお送りします。

## 物語

ブリジットとその恋人リチャードが住むマンハッタンのアパート。眠れぬ夜を過ごした後、ブリジットの父エリックは、フィラデルフィア郊外から、妻ディアドラ、娘のエイミー、認知症の祖母モモを連れ、感謝祭を祝うために二人の新居を訪れる。雑多なチャイナタウンにある老朽化したアパートでは、階上の住人の奇怪な物音や、階下のランドリールームの轟音がして、祝日だというのに落ち着かない。そんな中始まった食事会では、次第にそれぞれがいま抱える人生の不安や悩みを語り出し、だんだんと陰鬱な雰囲気を帯びてくる……。

**翻訳家からのメッセージ**

**広田敦郎**

とても定義しがたい作品です。一見サイエンス・フィクションかと思わせるタイトルでもあるようですが、どんなお芝居かは想像しにくいでしょう。

一家が集まる感謝祭のディナー、夜更けとともに浮かび上がる不都合な真実、と、いかにも〈アメリカの家族劇〉らしくまとめることもできますが、それではあまりにも新しくないし……何も特別なところのない、ごく普通の家族の営みにほっこりしながら、そこはかたない不安にさいなまれ、「いま何を見せられたの？」と若干もやっとながら劇場を後にする感じの、怪談じみたお芝居、でしょうか。

『ハミルトン』がトニー賞ベスト・ミュージカルとピューリッツァー賞に選ばれた2016年、トニー賞ベスト・プレイに選ばれ、ピューリッツァー賞ファイナリストまで残ったお芝居です。バラク・オバマ政権が終わりに近づき、そしてまもなくドナルド・トランプが大統領に選ばれることを大勢が予想していなかった（あるいは予想していたでしょうか？）ころ、初演されたお芝居です。

19世紀から20世紀の変わり目、チャーホフの新作劇を観た人々と同じような気持ちを味わえるお芝居、かもしれません。

一時間半の不安を劇場で分かち合うことが楽しみです。

**演出家からのメッセージ**

**桑原裕子**

人が、不安を抱くのはどんなときだろう、と考えていました。

幼い頃は、そこにはないはずの物がある、見えない者が見える、聞こえてはいけない音が……という、いわばゴーストのような未知なる存在に恐れ、何もない暗闇の奥に目をこらしていたものです。

けれどいつからか、不安はその逆にある、とを感じるようになりました。

あるはずのものが無い。見えていたことを見失う。信じていたものが失われてゆく。それは、信頼であるとか関係だとか絆だとか記憶だとか愛だとか、自分自身であるとか。あるいは文化だとか、社会だとか。私たちの暮らしている世界は、永遠に進化していくものだと思い込んでいたけれど、そうではなかったのだと、ここ10年ほどの間で急速に感じるようにもなりました。以来ずっと、足下に不安が漂っています。

失われていく予感こそが、不安の正体なのかもしれません。

『ザ・ヒューマンズ—人間たち』は、ひとつの家族の、ほんの僅かな時間を切り取った作品です。あなたも私もよく知るような……けれど、我々が平気な顔をして日々を営みながらひた隠しにしてきた恐ろしい何か、が、不気味な軋みをあげて満ちてゆく恐怖劇でもあります。家族という小さな社会で蠢く人間たちを、私も足をすくませながら見届けます。

## スタッフ プロフィール

## スティーヴン・キャラム

Stephen KARAM

1980年ペンシルベニア州スクラントンでレバノン系アメリカ人の家庭に生まれる。ブランク・シアターの全国青少年劇作家フェスティバルで97年から99年まで3年連続優勝。2001年、ブラウン大学在学中、ミュージカル『エマ』でケネディ・センター・アメリカ大学演劇フェスティバルのミュージカル賞を受賞。大学卒業後、ユタ・シェイクスピア・フェスティバルで実習生として働く。12年、『預言者の息子たち』がピューリッツァー賞演劇部門最終候補となり、ニューヨーク演劇批評家協会賞、アウター批評家協会賞、ルシール・ローテル賞の最優秀プレイを受賞。『ザ・ヒューマンズ』は14年アメリカン・シアター・カンパニー製作によりシカゴで初演され、15年ラウンドアバウト・シアター・カンパニー製作によりニューヨーク、オフ・ブロードウェイで上演、16年にはキャラムのブロードウェイ・デビュー作となり、再びピューリッツァー賞演劇部門最終候補、トニー賞およびニューヨーク演劇批評家協会賞の最優秀プレイ、オビー賞劇作賞を受賞。その他の戯曲に、『桜の園』（チェーホフの翻案）、『ダーク・シスターズ』（室内オペラの作詞）、『スピーチ&ディベート』、『コロンバイナス』など。映画脚本に『スピーチ&ディベート』、『かもめ』（チェーホフの翻案/マイケル・メイヤー監督）。21年、A24製作による『ザ・ヒューマンズ』ではキャラム自身が監督も務め、エイミー・シューマン、ビーニー・フェルドスタイン、スティーヴン・ユアンらが出演、高く評価された。

## 広田敦郎

HIROTA Atsuro

※20ページを参照



## 桑原裕子

KUWABARA Yuko

東京都出身。劇作家・演出家・俳優。劇団KAKUTA主宰。穂の国とよはし芸術劇場PLAT芸術監督。

2009年KAKUTA『甘い丘』で第64回文化庁芸術祭・芸術祭新人賞（脚本・演出）受賞。16年KAKUTA『痕跡』第18回鶴屋南北戯曲賞受賞。18年穂の国とよはし芸術劇場PLATプロデュース『荒野』で第5回ハヤカワ「悲劇喜劇」賞および読売文学賞戯曲シナリオ部門受賞。19年に劇団作品『ひとよ』が白石和彌監督で映画化。映像脚本として、NHK昭和歌謡ミュージカル『また逢う日まで』など。その他近年の主な舞台に『たわごと』（作・演出）『少女都市からの呼び声』（出演）『誤餐』（作・演出）『閃光ばなし』（出演）などがある。新国立劇場では『ロビー・ヒーロー』を演出。



# 消えていくなら朝

Morning Disappearance

小劇場

●会員先行販売期間：2025年4/19(土)～4/28(月)

●一般発売日：2025年5/6(火・休)

作・演出：蓬萊竜太

Written and Directed by HORAI Ryuta

出演：2024年2・3月実施予定のオーディション合格者

Cast：Cast selected by audition in Feb.-Mar.2024

## 作品

小川絵梨子芸術監督が、その就任とともに打ち出した柱の一つ、「すべての出演者をオーディションで決定する」フルオーディション企画、その第7弾は、2018年7月に蓬萊竜太が新国立劇場のために書き下ろし、宮田慶子が演出、第6回ハヤカワ「悲劇喜劇」賞を受賞した『消えていくなら朝』。最も身近で、最も厄介な存在である「家族」を、蓬萊独自の視点で切り取った傑作を、今回は蓬萊竜太自身が演出します。2024年1月に公募を開始、2～3月にかけてオーディションを行い、6名の出演者を決定します。

## 物語

家族と疎遠の作家である定男は、五年ぶりに帰省する。作家として成功をおさめている定男であったが、誰もその話に触れようとしない。むしろその話を避けている。家族は定男の仕事に良い印象を持っていないのだ。定男は切り出す。

「.....今度の新作は、この家族をありのままに描いてみようと思うんだ」

家族とは、仕事とは、人生とは、愛とは、幸福とは、親とは、子とは、そして表現とは、様々な議論の火ぶたが切って落とされた。本音をぶつけあった先、その家族に何が起こるのか。

何が、残るのか。



**作・演出家からのメッセージ**

**蓬萊竜太**

---

この作品は2018年に新国立劇場に書き下ろした作品です。当時の芸術監督であった宮田慶子さんから執筆のオファーをいただき、僕自身は演出をしないという大前提があったからこそ書けた作品でもありました。僕の中では結構思い切った作品でした。自分のコアのような部分に触れたり、時には叩いてみたり、踏んづけたりするような感じがありました。

今回この作品で演出をしませんか、フルオーディションでやりませんか、という依頼をいただいた際には、そう来たかと、色々な意味で震える思いをしました。応募してくださる方も挑戦ですが、間違いなく僕にとっても挑戦になります。

共に模索しながら、共に悩みながら、新たな作品を生み出せたらと思っています。

## スタッフ プロフィール

## 蓬菜竜太

HORAI Ryuta

劇作家・脚本家・演出家。1999年に劇団モダンスイマーズの旗揚げに参加。以降、全公演の作・演出を務める。2019年、モダンスイマーズ『ビューティフルワールド』において第27回読売演劇大賞優秀演出家賞を受賞。近年の劇団外公演に『ひげよ、さらば』『広島ジャンゴ2022』『首切り王子と愚かな女』『渦が森団地の眠れない子たち』、赤坂大歌舞伎『夢幻恋双紙 赤目の転生』の作・演出などのほか、21年より自身がプロデュースする演劇ユニット・アンカルをスタートさせ、『昼下がりの思春期たちは漂う狼のようだ』の作・演出など、意欲的に活動している。第53回岸田國士戯曲賞（『まほろば』）、第20回鶴屋南北戯曲賞（『母と惑星について、および自転する女たちの記録』）、第6回ハヤカワ「悲劇喜劇」賞（『消えていくなら朝』）など受賞多数。映画「劇場」「ピンクとグレー」、テレビドラマ「平成細雪」などの脚本も手掛ける。

24年2月6日より、舞台『中村仲蔵～歌舞伎王国 下剋上異聞～』（脚本:源孝志/主演:藤原竜也）の演出を務めている。新国立劇場では『消えていくなら朝』のほか、『エネミー』『まほろば』を執筆、『プレス・オブ・ライフ～女の肖像～』の演出を手掛けている。



# Drama

プロジェクト

こつこつプロジェクト —ディベロップメント—

---

ギャラリープロジェクト

---

---

---

# こつこつプロジェクト —ディベロップメント—

KOTSUKOTSU Project —Development—

## 第三期

---

### 概要

「作り手が通常の一か月の稽古ではできないことを試し、作り、壊して、また作る場にしたい。」という小川芸術監督の意を受け、一年間を通して作品を育てていくプロジェクト。具体的には、3~4か月ごとに試演を実施し、その都度、演出家と芸術監督、制作スタッフが協議を重ね、上演作品がどの方向に育っていくのか、またその方向性が妥当なのか、そしてその先の展望にどのような可能性が待っているのかを見極めていきます。時間に追われない稽古のなかで、作り手の全員が問題意識を共有し、作品への理解を深めることで、舞台芸術の奥深い豊かさを一人でも多くの観客の方々に伝えられる公演となることを目標とします。

第一期参加作品からは、『あーぶくたった、にいたった』（西沢栄治演出）を2021/2022シーズンに上演いたしました。第二期参加作品からは、今シーズン11月に『テーバイ』（船岩祐太演出）を、4月には、こつこつプロジェクトStudio公演として『夜の道づれ』（柳沼昭徳演出）の上演を予定しています。

2024年夏ごろからスタートする第三期には、第二期から継続して参加する柳沼昭徳に加え、新たにこの主旨に賛同いただけた栗原崇、鈴木アツトの二人の演出家が参加いたします。

### 参加演出家

■栗原 崇

■鈴木アツト

■柳沼昭徳

参加演出家 プロフィール

栗原 崇

KURIHARA Takashi

早稲田大学卒業後渡米。ニューヨークにて、The Actors Studioが運営するアクターズスタジオ大学院演出家コースでリアリズム演技理論を基礎とした演出術並びにリー・ストラスバーグ・メソッド演技術を学ぶ。

演出作品に、『草笛光子&館野泉 音楽と物語の世界』、ミュージカル『GIFT』、『みんな我が子』、『マット&ベン』（日本初演）、『エアスミミング』（日本初演）、『動物園物語』、『山羊』、『バウンティフルへの旅』、『春のめざめ』、『リトル・ショップ・オブ・ホラーズ』など翻訳作品を中心に多数。

ミュージカル公演における演技指導や、演技コーチとしても精力的に活動中。



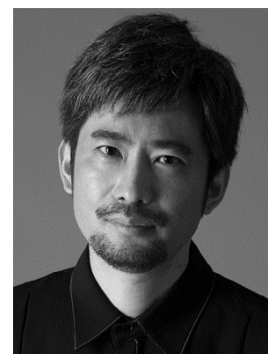
鈴木アツト

SUZUKI Atsuto

劇作家、演出家。2003年に劇団印象-indian elephant-を旗揚げ。15年国際交流基金アジアセンター アジアフェロー。同年、文化庁新進芸術家海外研修制度の研修員としてロンドンへ留学。19年、ポーランド・ドルマーナ劇場で児童向け演劇作品『CiufCiuf!』（作・演出）を滞在創作。

主な作品として、『エーリヒ・ケストナー～消された名前～』『藤田嗣治～白い暗闇～』『ジョージ・オーウェル～沈黙の声～』『カレル・チャペック～水の足音～』など。

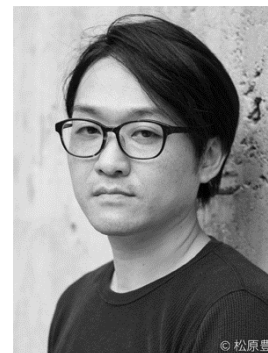
著書として『犬と独裁者』がある。



柳沼昭徳

YAGINUMA Akinori

※17ページを参照



---

---

# ギャラリープロジェクト

GALLERY Project

---

## 概要

ーギャラリープロジェクトとは？

新国立劇場では演劇芸術監督 小川絵梨子の方針の下、演劇の作り手の方々との交流を深め積極的に連携して、幅広い観客層に演劇をお届けしたいと思っています。そのために、一般の方々に向けてのワークショップや講演などを実施しており、その一環としての演劇イベントが「ギャラリープロジェクト」です。

舞台という豊かな世界を、一人でも多くの皆様に楽しんでいただければ幸いです。

それぞれの詳細は、随時ウェブなどで発信します。

### ○トークセッション

〈演劇のおしごと〉

演劇に携わるクリエイターや団体との「横の繋がり」を広げ、その仕事に迫るトークセッション。

毎回様々なジャンルからゲストを迎え、進行役の小川絵梨子芸術監督と普段なかなか知ることができない仕事について掘り下げていきます。

〈演劇噺（えんげきばなし）〉

毎回様々なゲストを迎えて、演劇に関する「あんな話、こんな話」を語っていただくシリーズ企画です。

ゲストと一緒に舞台の面白さ、奥深さを探っていきます。

### ○ワークショップ

毎年夏休みの時期、中高生を対象に、日本の演劇界の第一線で活躍するスタッフ、クリエイター、俳優の特別講義やワークショップを行う「中高生のためのどっぷり演劇days」を開催しています。

### ○公演ガイドツアー

公演中の劇場にて、公演スタッフが舞台美術の説明や開幕に至るまでの足跡等を解説いたします。

# Drama

## 公演一覧

開場記念公演～2023/2024 シーズン

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
開場記念公演	★紙屋町さくらホテル	井上ひさし		渡辺浩子	1997. 10/22
	[蒲田行進曲完結編]銀ちゃんが逝く	つかこうへい		つかこうへい	1997. 11/13
	夜明け前	原作 島崎藤村	脚色 村山知義 補訂脚本 津上 忠	木村光一	1997. 12/04
	リア王	ウィリアム・シェイクスピア	松岡和子	鶴山 仁	1998. 1/17
1998/ 1999	★虹を渡る女	岩松 了		岩松 了	1998. 5/07
	幽霊はここにいる	安部公房		串田和美	1998. 5/12
	★今宵かぎりは… 1928 超巴里井主義宣言の夜	竹内統一郎		栗山民也	1998. 6/12
	★音楽劇 ブッダ	原作 手塚治虫	脚本 佐藤 信	栗山民也	1998. 9/07
	<b>THE PIT フェスティバル</b>				
	カストリ・エレジー スタインベック「二十日鼠と人間」 より	脚本 鐘下辰男		鐘下辰男	1998. 10/03
	神々の国の首都	坂手洋二		坂手洋二	1998. 10/17
	寿歌	北村 想		北村 想	1998. 10/29
	ディア・ライアー すてきな嘘つき	ジェローム・キルティ	丹野郁弓	宮田慶子	1998. 11/04
	野望と夏草	山崎正和		西川信廣	1998. 12/02
	★新・雨月物語		脚本 鐘下辰男	鶴山 仁	1999. 1/11
	子午線の祀り	木下順二	演出 観世栄夫／内山 鶴／酒井 誠／高瀬精一郎		1999. 2/03
	セツアンの善人	ベルトルト・ブレヒト	松岡和子	串田和美	1999. 5/18
	羅生門	原作 芥川龍之介		構成・演出 渡辺和子	1999. 6/04
棋人 一チーレン	過 士行	菱沼彬晁	林 兆華	1999. 7/01	
1999/ 2000	キーン 或いは狂気と天才	J.P.サルトル 上演台本 栗山民也／江守 徹	鈴木力衛	栗山民也	1999. 10/04
	美しきものの伝説		宮本 研	木村光一	1999. 11/04
	<b>—森本薫の世界—</b>				
	かくて新年は	森本 薫		宮田慶子	1999. 12/08
	怒濤	森本 薫		マキノノゾミ	2000. 1/11
	華々しき一族	森本 薫		鐘下辰男	2000. 2/09
	★新・地獄変	原作 芥川龍之介	脚本 鐘下辰男	鶴山 仁	2000. 3/23
	なよたけ	加藤道夫		木村光一	2000. 4/11
夜への長い旅路	ユージン・オニール	沼澤治治	栗山民也	2000. 5/11	
2000/ 2001	マクベス	ウィリアム・シェイクスピア	福田恒存翻訳より 潤色 鐘下辰男	鐘下辰男	2000. 9/08
	ブロードウェイ・ミュージカル 太平洋序曲	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジョン・ワイドマン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	2000. 10/02
	欲望という名の電車	テネシー・ウィリアムズ	鳴海四郎	栗山民也	2000. 10/20
	<b>シリーズ「時代と記憶」</b>				
	★memorandum メモランダム	構想・構成 ダムタイプ			2000. 11/27
	★母たちの国へ	松田正隆		西川信廣	2001. 1/10
	★ピカドン・キジムナー	坂手洋二		栗山民也	2001. 2/10
	★こんにちは、母さん	永井 愛		永井 愛	2001. 3/12
	★夢の裂け目	井上ひさし		栗山民也	2001. 5/08
	紙屋町さくらホテル	井上ひさし		渡辺浩子／井上ひさし	2001. 4/04
	贋作・桜の森の満開の下	野田秀樹		野田秀樹	2001. 6/01

★=新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2001/ 2002	海外招待作品 Vol.1 太陽劇団 堤防の上の鼓手	エレヌ・シクスー	字幕翻訳 松本伊瑳子	アリアヌ・ムヌーシュキン	2001. 9/07
	コペンハーゲン	マイケル・フレイン	平川大作	鶴山 仁	2001. 10/29
	★美女で野獣	荻野アンナ		宮田慶子	2001. 12/10
	シリーズ チェーホフ・魂の仕事				
	Vol.1 かもめ	アントン・チェーホフ	英訳 マイケル・フレイン 翻訳 小田島雄志	マキノノゾミ	2002. 1/11
	Vol.2 くしゃみ/the Sneeze	アントン・チェーホフ	台本 マイケル・フレイン 翻訳 小田島恒志	熊倉一雄	2002. 2/28
	Vol.3 ★「三人姉妹」を追放されし トウゼンバフの物語	岩松 了		岩松 了	2002. 4/01
	Vol.4 ワーニャおじさん 四幕の田園生活劇	アントン・チェーホフ	小野理子	栗山民也	2002. 5/09
	Vol.5 櫻の園	アントン・チェーホフ	潤色 堀越 真(神西清翻訳による)	栗山民也	2002. 6/21
★その河をこえて、五月	平田オリザ/金 明和		李 炳焄/平田オリザ	2002. 6/03	
2002/ 2003	海外招待作品 Vol.2 国際チェーホフ演劇祭 in モスクワ ハムレット	ウィリアム・シェイクスピア		ペーター・シュタイン	2002. 9/07
	ブロードウェイ・ミュージカル 太平洋序曲	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジョン・ワイドマン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	2002. 10/11
	★アヤジルシ -誘われて	太田省吾		太田省吾	2002. 11/12
	シリーズ「現在へ、日本の劇」				
	①ピルグリム	鴻上尚史		鴻上尚史	2003. 1/14
	②浮標	三好十郎		栗山民也	2003. 2/19
	③マッチ売りの少女	別役 実		坂手洋二	2003. 4/08
	④サド侯爵夫人	三島由紀夫		鐘下辰男	2003. 5/26
	★涙の谷、銀河の丘	松田正隆		栗山民也	2003. 5/13
★ゴロヴリョフ家の人々	原作 サルティコフ・シチェドリ 脚本 永井 愛	翻訳 湯浅芳子 脚本 永井 愛	永井 愛	2003. 6/18	
2003/ 2004	★nocturne -月下の歩行者	構成 松本雄吉		松本雄吉	2003. 9/08
	★夢の泪	井上ひさし		栗山民也	2003. 10/09
	世阿彌	山崎正和		栗山民也	2003. 11/27
	シリーズ「女と男の風景」				
	①海外招待作品 Vol.3 香港・劇場組合 The Game /ザ・ゲーム	ウジェーヌ・イヨネスコの悲喜劇 『椅子』より 翻案 ジム・チム/ オリヴィア・ヤン	字幕 角田美知代	ジム・チム/ オリヴィア・ヤン	2004. 2/20
	② ★THE OTHER SIDE ／線のむこう側	アリエル・ドーフマン	水谷八也	孫 振策	2004. 4/12
	③★てのひらのこびと		鈴江俊郎	松本祐子	2004. 5/11
	④請願 -静かな叫び-	ブライアン・クラーク	吉原豊司	木村光一	2004. 6/22
	こんにちは、母さん	永井 愛		永井 愛	2004. 3/10
透明人間の蒸気	野田秀樹		野田秀樹	2004. 3/17	
ブロードウェイ・ミュージカル INTO THE WOODS	作詞・作曲 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェイムズ・ラパイン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	2004. 6/09	

★=新作



シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2004/ 2005	THE LOFT 小空間からの提案				
	胎内	三好十郎		栗山民也	2004. 10/04
	◎ ★ヒトノカケラ	篠原久美子		宮崎真子	2004. 10/22
	★二人の女兵士の物語	坂手洋二		坂手洋二	2004. 11/08
	喪服の似合うエレクトラ	ユージン・オニール	沼澤治治	栗山民也	2004. 11/16
	★城	原作 フランツ・カフカ	構成 松本 修	松本 修	2005. 1/14
	シリーズ 笑い				
	①花咲く港	菊田一夫		鶴山 仁	2005. 3/14
	②★コミュニケーションズ 現代劇作家によるコント集	作 綾田俊樹/いとうせいこう/ケラリーノ・サンドロヴィッチ/杉浦久幸 高橋徹郎/竹内 佑/鄭 義信/土田英生/別役 実/ふじきみつ彦/武藤真弓 原作使用 筒井康隆		構成・演出 渡辺えり子	2005. 4/08
	③★箱根強羅ホテル	井上ひさし		栗山民也	2005. 5/19
	④うら騒ぎ ノイズズ・オフ	マイケル・フレイン	小田島恒志	白井 晃	2005. 6/27
	その河をこえて、五月	平田オリザ/金 明和		李 炳焄/平田オリザ	2005. 5/13
海外招待作品 Vol.4 ベルリナー・アンサンブル アルトゥロ・ウイの興隆	ベルトルト・ブレヒト	イヤホンガイド翻訳 新野守広	ハイナー・ミュラー	2005. 6/22	
2005/ 2006	◎黒いチューリップ/盲導犬	唐 十郎		中野敦之	2005. 9/27
	◎屋上庭園/動員挿話	岸田國士		宮田慶子<屋上庭園> 深津篤史<動員挿話>	2005. 10/31
	母・肝っ玉とその子供たち -三十年戦争年代記	ベルトルト・ブレヒト	谷川道子	栗山民也	2005. 11/28
	ガラスの動物園	テネシー・ウィリアムズ	小田島雄志	イリーナ・ブルック	2006. 2/09
	十二夜	ウィリアム・シェイクスピア	脚本 山崎清介 小田島雄志翻訳による	山崎清介	2006. 3/07
	シリーズ「われわれは、どこへいくのか」				
	①★カエル	過 士行	菱沼彬晃	鶴山 仁	2006. 4/01
	◎ ②★マテリアル・ママ		岩松 了	岩松 了	2006. 4/19
	③★やわらかい服を着て	永井 愛		永井 愛	2006. 5/22
	④★夢の痲	井上ひさし		栗山民也	2006. 6/28
	ブロードウェイ・ミュージカル Into the Woods	作詞・作曲 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェイムズ・ラパイン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	2006. 5/19
	★アジアの女	長塚圭史		長塚圭史	2006. 9/28
「劇的な情念をめぐって」-世界の名作より-					
2006/ 2007	シラノ・ド・ベルジュラック	原作 エドモン・ロスタン	翻訳 辰野 隆/ 鈴木信太郎	構成・演出 鈴木忠志	2006. 11/02
	イワーノフ/ オイディプス王	原作 アントン・チェーホフ 原作 ソフォクレス	翻訳 池田健太郎 日本語 福田恒存 ドイツ語 ヘルダーリン	構成・演出 鈴木忠志	2006. 11/04
	◎ ★エンジョイ	岡田利規		岡田利規	2006. 12/07
	コペンハーゲン	マイケル・フレイン	平川大作	鶴山 仁	2007. 3/01
	★CLEANSKINS /きれいな肌	シャン・カーン	小田島恒志	栗山民也	2007. 4/18
	★下周村 -花に嵐のたとえもあるさ-	平田オリザ/李 六乙		李 六乙/平田オリザ	2007. 5/15
	夏の夜の夢	ウィリアム・シェイクスピア	松岡和子	ジョン・ケアード	2007. 5/31
	氷屋来たる	ユージン・オニール	沼澤治治	栗山民也	2007. 6/18

★=新作 ◎=THE LOFT 公演

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2007/ 2008	「三つの悲劇」ーギリシャから				
	Vol.1 ★アルゴス坂の白い家 ークリュタイムストラー	川村 毅		鶴山 仁	2007. 9/20
	Vol.2 ★たとえば野に咲く花のように ーアンドロマケー	鄭 義信		鈴木裕美	2007. 10/17
	Vol.3 ★異人の唄 ーアンティゴネー	土田世紀	脚色 鐘下辰男	鐘下辰男	2007. 11/14
	屋上庭園／動員挿話	岸田國士		宮田慶子〈屋上庭園〉 深津篤史〈動員挿話〉	2008. 2/26
	★焼肉ドラゴン	鄭 義信		梁 正雄／鄭 義信	2008. 4/17
	オットーと呼ばれる日本人	木下順二		鶴山 仁	2008. 5/27
	シリーズ・同時代				
	Vol.1 ★鳥瞰図 ーちようかんずー	早船 聡		松本祐子	2008. 6/11
	Vol.2 ★混じりあうこと、消えること	前田司郎		白井 晃	2008. 6/27
Vol.3 ★まほろば	蓬萊竜太		栗山民也	2008. 7/14	
2008/ 2009	近代能楽集『綾の鼓』『弱法師』	三島由紀夫		前田司郎〈綾の鼓〉 深津篤史〈弱法師〉	2008. 9/25
	山の巨人たち	ルイジ・ピランデルロ	翻訳 田之倉稔	ジョルジュ・ラヴオーダン	2008. 10/23
	舞台は夢 ーリユージュン・コミックー	ピエール・コルネイユ	翻訳 伊藤 洋	鶴山 仁	2008. 12/03
	シリーズ・同時代【海外編】				
	Vol.1 昔の女	ローラント・シンメルプフェニヒ	翻訳 大塚 直	倉持 裕	2009. 3/12
	Vol.2 シュート・ザ・クロウ	オーウェン・マカファーティ	翻訳 浦辺千鶴／ 小田島恒志	田村孝裕	2009. 4/10
	Vol.3 タトゥー	デーア・ローアー	翻訳 三輪玲子	岡田利規	2009. 5/15
	夏の夜の夢	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 松岡和子	ジョン・ケアード	2009. 5/29
★現代能楽集 鶴	坂手洋二		鶴山 仁	2009. 7/02	
2009/ 2010	ヘンリー六世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	
	第一部 百年戦争				2009. 10/27
	第二部 敗北と混乱				2009. 10/28
	第三部 薔薇戦争				2009. 10/29
	象	別役 実		深津篤史	2010. 3/05
	東京裁判三部作	井上ひさし		栗山民也	
	夢の裂け目				2010. 4/04
	夢の泪				2010. 5/06
	夢の痲かさぶた				2010. 6/03
	★エネミイ	蓬萊竜太		鈴木裕美	2010. 7/01
2010/ 2011	[JAPAN MEETS... ー現代劇の系譜をひもとくー]				
	I ヘッダ・ガーブレル	ヘンリック・イブセン	翻訳 アンネ・ランデ・ペータス ／長島 確	宮田慶子	2010. 9/17
	II やけたトタン屋根の上の猫	テネシー・ウィリアムズ	翻訳 常田景子	松本祐子	2010. 11/09
	III わが町	ソートン・ワイルダー	翻訳 水谷八也	宮田慶子	2011. 1/13
	IV ゴドーを待ちながら	サミュエル・ベケット	翻訳 岩切正一郎	森 新太郎	2011. 4/15
	焼肉ドラゴン	鄭 義信	翻訳 川原賢柱	鄭 義信	2011. 2/07
	鳥瞰図 ーちようかんずー	早船 聡		松本祐子	2011. 5/10
	雨	井上ひさし		栗山民也	2011. 6/09
	★おどくみ	青木 豪		宮田慶子	2011. 6/27

★=新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2011/ 2012	<b>【美×劇】</b> —滅びゆくものに託した美意識—				
	I 朱雀家の滅亡	三島由紀夫		宮田慶子	2011. 9/20
	II ★イロアセル	倉持 裕		鶴山 仁	2011. 10/18
	III 天守物語	泉 鏡花		白井 晃	2011. 11/05
	★パーマ屋スマレ	鄭 義信		鄭 義信	2012. 3/05
	まぼろば	蓬莱竜太		栗山民也	2012. 4/02
	負傷者 16 人 —SIXTEEN WOUNDED—	エリアム・クライエム	翻訳 常田景子	宮田慶子	2012. 4/23
	<b>[JAPAN MEETS…]</b> —現代劇の系譜をひもとく—				
V サロメ	オスカー・ワイルド	翻訳 平野啓一郎	宮本亜門	2012. 5/31	
VI 温室	ハロルド・ピンター	翻訳 喜志哲雄	深津篤史	2012. 6/26	
2012/ 2013	リチャード三世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	2012. 10/03
	<b>[JAPAN MEETS…]</b> —現代劇の系譜をひもとく—				
	VII りつぽ	アーサー・ミラー	翻訳 水谷八也	宮田慶子	2012. 10/29
	★音のいない世界で	長塚圭史	振付 近藤良平	長塚圭史	2012. 12/23
	長い墓標の列	福田善之		宮田慶子	2013. 3/07
	<b>With 一つながる演劇—</b>				
	★ウェールズ編『効率学のススメ』	アラン・ハリス	翻訳 長島 確	ジョン・E・マグラ	2013. 4/09
	★韓国編 アジア温泉	鄭 義信	翻訳 朴 賢淑	孫 振策	2013. 5/10
★ドイツ編 つく、きえる	ローラント・シンメルプフェニヒ	翻訳 大塚 直	宮田慶子	2013. 6/04	
象	別役 実		深津篤史	2013. 7/02	
2013/ 2014	<b>Try・Angle —三人の演出家の視点—</b>				
	Vol.1 OPUS / 作品	マイケル・ホリンガー	翻訳 平川大作	小川絵梨子	2013. 9/10
	Vol.2 エドワード二世	クリストファー・マーロウ	翻訳 河合祥一郎	森 新太郎	2013. 10/08
	Vol.3 アルトナの幽閉者	ジャン＝ポール・サルトル	翻訳 岩切正一郎	上村聡史	2014. 2/19
	<b>[JAPAN MEETS…]</b> —現代劇の系譜をひもとく—				
	VIII ピグマリオン	ジョージ・バーナード・ショー	翻訳 小田島恒志	宮田慶子	2013. 11/13
	マニラ瑞穂記	秋元松代		栗山民也	2014. 4/03
	テンベスト	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 松岡和子	白井 晃	2014. 5/15
★十九歳のジェイコブ	原作 中上健次	脚本 松井 周	松本雄吉	2014. 6/11	
永遠の瞬間 —Time Stands Still —	ドナルド・マーグリーズ	翻訳 常田景子	宮田慶子	2014. 7/08	
2014/ 2015	<b>[JAPAN MEETS…]</b> —現代劇の系譜をひもとく—				
	IX 三文オペラ	ベルトルト・ブレヒト	翻訳 谷川道子	宮田慶子	2014. 9/10
	<b>二人芝居 —対話するカー—</b>				
	Vol.1 プレス・オブ・ライフ～女の肖像～	デイヴィッド・ヘア	翻訳 鶴澤麻由子	蓬莱竜太	2014. 10/08
	Vol.2 ご臨終	モーリス・パニッチ	翻訳 吉原豊司	ノゾエ征爾	2014. 11/05
	Vol.3 星ノ数ホド	ニック・ペイン	翻訳 浦辺千鶴	小川絵梨子	2014. 12/03
	ウィンズロウ・ボーイ	テレンス・ラティガン	翻訳 小川絵梨子	鈴木裕美	2015. 4/09
	<b>[JAPAN MEETS…]</b> —現代劇の系譜をひもとく—				
X 海の夫人	ヘンリック・イブセン	翻訳 アンネ・ランデ・ペータス ／長島 確	宮田慶子	2015. 5/13	
東海道四谷怪談	鶴屋南北	上演台本 フジノサツコ	森 新太郎	2015. 6/10	
★かがみのかなたはたなかのなかに	長塚圭史	振付 近藤良平	長塚圭史	2015. 7/06	

★＝新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2015/ 2016	パッション	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェームス・ラパイン	翻訳 浦辺千鶴 訳詞 竜 真知子	宮田慶子	2015. 10/16
	桜の園	アントン・チェーホフ	翻訳 神西 清	鶴山 仁	2015. 11/11
	バグダッド動物園のベンガルタイガー	ラジヴ・ジョセフ	翻訳 平川大作	中津留章仁	2015. 12/08
	<b>鄭義信 三部作</b>				
	焼肉ドラゴン	鄭 義信		鄭 義信	2016. 3/07
	たとえば野に咲く花のように	鄭 義信		鈴木裕美	2016. 4/06
	パーマ屋スマレ	鄭 義信		鄭 義信	2016. 5/17
	あわれ彼女は娼婦	ジョン・フォード	翻訳 小田島雄志	栗山民也	2016. 6/08
★「かぐや姫伝説」より月・こうこう・風・そうそう	別役 実		宮田慶子	2016. 7/13	
2016/ 2017	フリック	アニメー・ベイカー	翻訳 平川大作	マキノノゾミ	2016. 10/13
	ヘンリー四世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	
	第一部 -混沌-				2016. 11/26
	第二部 -戴冠-				2016. 11/27
	<b>かさなる視点 -日本戯曲のカー-</b>				
	Vol.1 白蟻の巣	三島由紀夫		谷 賢一	2017. 3/02
	Vol.2 城塞	安部公房		上村聡史	2017. 4/13
	Vol.3 マリアの首 -幻に長崎を想う曲-	田中千禾夫		小川絵梨子	2017. 5/10
	<b>[JAPAN MEETS... -現代劇の系譜をひもとく-]</b>				
	XI 君が人生の時	ウィリアム・サローヤン	翻訳 浦辺千鶴	宮田慶子	2017. 6/13
XII 怒りをこめてふり返れ	ジョン・オズボーン	翻訳 水谷八也	千葉哲也	2017. 7/12	
2017/ 2018	トロイ戦争は起こらない	ジャン・ジロドゥ	翻訳 岩切正一郎	栗山民也	2017. 10/05
	プライムたちの夜	ジョーダン・ハリソン	翻訳 常田景子	宮田慶子	2017. 11/07
	かがみのかなたはたなかのなかに	長塚圭史	振付 近藤良平	長塚圭史	2017. 12/05
	赤道の下のマクベス	鄭 義信		鄭 義信	2018. 3/06
	1984	原作 ジョージ・オーウェル	脚本 ロバート・アイク ／ダンカン・マクミラン 翻訳 平川大作	小川絵梨子	2018. 4/12
	ヘンリー五世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	2018. 5/17
	夢の裂け目	井上ひさし		栗山民也	2018. 6/04
	★消えていくなら朝	蓬萊竜太		宮田慶子	2018. 7/12
	誤解	アルペール・カミュ	翻訳 岩切正一郎	稲葉賀恵	2018. 10/04
誰もいない国	ハロルド・ピンター	翻訳 喜志哲雄	寺十 吾	2018. 11/08	
スカイライト	デイヴィッド・ヘア	翻訳 浦辺千鶴	小川絵梨子	2018. 12/06	
<b>フルオーデション1</b>					
2018/ 2019	かもめ	作 アントン・チェーホフ 台本 トム・ストップパード	翻訳 小川絵梨子	鈴木裕美	2019. 4/11
	★少年王者館 1001	天野天街		天野天街	2019. 5/14
	オレスティア	原作 アイスキュロス 作 ロバート・アイク	翻訳 平川大作	上村聡史	2019. 6/06
	★骨と十字架	野木萌葱		小川絵梨子	2019. 7/11
	<b>こつこつプロジェクト -ディベロップメント- リーディング公演</b>				
	リチャード三世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 松岡和子	西 悟志	2019. 3/13
	あーぶくたつた、にいたつた	別役 実		西沢栄治	2019. 3/14
	スペインの戯曲	ヤスミナ・レザ	翻訳 穴澤万里子	大澤 遊	2019. 3/15

★=新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2019/ 2020	ことぜんシリーズ				
	Vol.1 どん底	マクシム・ゴーリキー	翻訳 安達紀子	五戸真理枝	2019. 10/03
	Vol.2 あの出来事	デイヴィッド・グレッグ	翻訳 谷岡健彦	瀬戸山美咲	2019. 11/13
	Vol.3 タージマハルの衛兵	ラジヴ・ジョセフ	翻訳 小田島創志	小川絵梨子	2019. 12/07
	フルオーデション 2				
	反応工程(公演中止)	宮本 研		千葉哲也	
	ガールズ&ボーイズ(公演中止)	デニス・ケリー	翻訳 小田島創志	蓬莱竜太	
	願いがかなうぐつぐつカクテル	ミヒヤエル・エンデ	翻訳 高橋文子	小山ゆうな	2020. 7/09
★イヌビト ~犬人~	長塚圭史	振付 近藤良平	長塚圭史	2020. 8/05	
2020/ 2021	ガラスの動物園(公演中止)	テネシー・ウィリアムズ		イヴォ・ヴァン・ホーヴェ	
	リチャード二世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	2020. 10/02
	ピーター&ザ・スターキャッチャー	作 リック・エリス 原作 デイヴ・バリー、 リドリー・ピアスン	翻訳 小宮山智津子	ノゾエ征爾	2020. 12/10
	人を思うちから				
	フルオーデション3 其の壱 斬られの仙太	三好十郎		上村聡史	2021. 4/06
	★其の貳 東京ゴッドファーザーズ	原作 今 敏 上演台本 土屋理敬		藤田俊太郎	2021. 5/12
	其の参 キネマの天地	井上ひさし		小川絵梨子	2021. 6/10
	フルオーデション 2 反応工程	宮本 研		千葉哲也	2021. 7/12
2021/ 2022	ガラスの動物園(公演中止)	テネシー・ウィリアムズ		イヴォ・ヴァン・ホーヴェ	
	フルオーデション 4 イロアセル	倉持 裕		倉持 裕	2021. 11/11
	あーぶくたった、にいたった	別役 実		西沢栄治	2021. 12/07
	声 議論, 正論, 権論, 批判, 対話...の物語				
	Vol.1 アンチポデス	アニー・ベイカー	翻訳 小田島創志	小川絵梨子	2022. 4/14
	Vol.2 ロビー・ヒーロー	ケネス・ロナーガン	翻訳 浦辺千鶴	桑原裕子	2022. 5/06
	Vol.3 貴婦人の来訪	フリードリヒ・デュレンマット	翻訳 小山ゆうな	五戸真理枝	2022. 6/01
2022/ 2023	ガラスの動物園	テネシー・ウィリアムズ		イヴォ・ヴァン・ホーヴェ	2022. 9/28
	レオポルトシュタット	トム・ストッパード	翻訳 広田敦郎	小川絵梨子	2022. 10/14
	未来につなぐもの ★Ⅰ 私の一ヶ月	須貝 英		稲葉賀恵	2022. 11/02
	★Ⅱ 夜明けの寄り鯨	横山拓也		大澤 遊	2022. 12/01
	フルオーデション 5 エンジェルス・イン・アメリカ	トニー・クシュナー	翻訳 小田島創志	上村聡史	2023. 4/18
	未来につなぐもの ★Ⅲ 楽園	山田佳奈		真鍋卓嗣	2023. 6/08
	★モグラが三千あつまって	原作 武井 博 上演台本 長塚圭史	振付 近藤良平 音楽 阿部海太郎	長塚圭史	2023. 7/14

★=新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2023/ 2024	シェイクスピア、ダークコメディ交互上演				
	尺には尺を	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鵜山 仁	2023. 10/18
	終わりよければすべてよし	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鵜山 仁	2023. 10/19
	<b>フルオーデション6</b>				
	東京ローズ	台本・作詞 メリヒー・ユーン／カーラ・ボルドウィン 作曲 ウィリアム・パトリック・ハリソン	翻訳 小川絵梨子 訳詞 土器屋利行 音楽監督 深沢桂子／村井一帆	藤田俊太郎	2023. 12/7
★デカローグ 1～10	原作 クシシュトフ・ケシロフスキ ／クシシュトフ・ピエシェヴィチ 上演台本 須貝 英	翻訳 久山宏一	小川絵梨子 ／上村聡史	2024. 4/13	

★＝新作

---

# MEMO

---

# MEMO